

## 20-21 年度夏期コース報告

千田昭予、橋本佳子、本間光徳、川西由美子  
加藤陽子、後藤恵利、結城佐織

### 1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (IUC) では、40 週間の通年コースに加えて 7 週間の夏期コースが設置されており、本年度は 2021 年 6 月 23 日 (木) より 8 月 11 日 (水) まで実施した。夏期コース修了者は 26 名<sup>1</sup>で、そのうち博士課程在籍/修了者が 12 名、修士課程在籍/修了者が 10 名、学部在籍/卒業生が 4 名であった。

本稿では、2 章で本年度の夏期コースの特徴、3 章で教育活動、4 章で課外活動、5 章で受講者による夏期コースへの評価について報告する。

### 2 本年度の夏期コースの特徴

長期化する新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2021 年の夏期コースは 3 月下旬にオンラインでの実施が決定した。IUC では遠隔授業のコース設計ならびにクラス運営は 2020 年 3 月から 1 年以上に亘って行われており、時差への対応や技術上の問題についての知見が蓄積されている (佐藤他 2020、結城他 2020)。受講者も多くが所属大学でオンライン学習に習熟した状態での開始となった。

遠隔学習は学習者の交流が生まれにくく、加えてほとんどの受講者が日本に来られない<sup>2</sup>状況下では目標言語に囲まれたイマーシブな環境が得難い。そこで受講者間の交流と授業外での日本語使用を促進するため、昨年同様受講者用談話室を月曜から金曜の授業後、web 会議システムの一つである Remo に設置した。Remo は期間中に全受講生が 3 回 (1 回 10 分) 主任と話す場としても用いられた。また、第 1 週から第 3 週までの金曜 3 限をクラブ活動の時間とし、クラス外の受講者と活動を通じて知り合う機会を作った。また、例年同様日本語母語話者との会話セッションを実施し、日本語での気楽な会話の機会を提供した。さらに、オンライン環境であっても日本の社会文化情報をコースに取り入れるべく、外部講師による講演会「課外学習」を 6 回開催した。

### 3 教育活動

本章では、3-1 で各クラスの授業実践、3-2 ではクラス授業への受講生の評価、3-3 では個人授業の概要について述べる。

クラス授業は2020年度夏期コース同様、ZOOMをプラットフォームとして、月曜日から金曜日の8:30から11:20（1限8:30-9:20、2限9:30-10:20、3限10:30-11:20）まで行われた。個人授業は受講者の希望に合わせてクラス授業の時間帯の前あるいは後に週に一度40分間行われた。

IUCのレギュラーコースでは2020-2021年度より学習管理システムの一つであるGoogle Classroomが導入され、学習資料の管理がしやすくなっていることから、夏期コースでも5クラス中3クラスがこのシステムを取り入れた。

また、本年は主な教材に市販書籍を使用する場合は受講者に購入を強く勧めた。アメリカの書店の在庫が限定的であったため、日本の書店から購入した者が多かったが、早ければ1週間以内に、遅くとも授業の2週目には手元に届いていた<sup>3</sup>。

### 3-1 クラス授業

#### 3-1-1 夏海クラス

##### 【人員構成】

担任:本間光徳、副担任:白石恵利奈

受講者6名：博士課程2名、修士課程1名、学部卒2名、学部生1名（歴史学1名、文学1名、大衆文化1名、コンピュータ・サイエンス／地域研究1名、経済学1名、日本語学1名）

##### 【コース目標】

#### A. 読む

- ・多様なテーマ・ジャンルの文章が読める。
- ・使用されている語句や表現から、テーマに対する筆者の立場を理解することができる。
- ・表現のかたさややわらかさを理解し、想定される読者を想像することができる。
- ・新聞見出しの助詞省略や短縮表現を理解し、短文として復元できる。

#### B. 聞く

- ・ニュースなどが聞き取れ、理解することができる。
- ・間のとり方、イントネーションによる発話者の意図を理解することができる。
- ・聞き取りにくい発話や不正確な発言も意味を推測して理解することができる。

#### C. 話す

- ・発音練習を反復し、より自然な発音を身につける。
- ・学術発表、ビジネスの場などにふさわしい話し方ができる。
- ・相手の質問や意図を理解し、適切な応答ができる。
- ・他者に配慮した発話ができる。
- ・私的な内容を一般化して話すことができる。

・リモート環境に配慮した話し方ができる。

#### D. 書く

・文章中の語句を用いて内容をまとめることができる。

・文章中の語句や構文を用いて作文ができる。

・比較的フォーマルなEメールを書くことができる。

・学術発表、ビジネスの場にふさわしいプレゼンテーションスライドを制作することができる。

・リモート環境に配慮したプレゼンテーションができる。

表1 夏海クラス時間割

	月	火	水	木	金
8:30-9:20	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現
9:30-10:20	読解	ニュース	読解	文法	発表・議論
10:30-11:20	議論・発表	新聞	議論・発表	文法演習	発表・議論

#### 【主な教材】

日本研究センター (2020) 『待遇表現』 日本研究センター

目黒真実 (2010) 『上級学習者のための日本語読解ワークブック』 アルク

安藤節子・小川誉子美 (2011)、中西久実子・庵功雄 (2010)、庵功雄・三枝令子 (2019)、小川誉子美・三枝令子 (2019) 『上級 日本語文法演習』 スリーエーネットワーク

#### 【コメント】

センター作成の『待遇表現』を徹底的に活用し全ユニットを学習、コース初日より口頭発表会を意識させ、期間中定形表現を積極的に使用させた。毎回1限を「待遇表現」とすることによりコースの一貫性を確保し、テキスト内容の9割程度以上を消化した。事前学習として、たとえイントネーションに自信がなくても、最低限「教科書を見ればできるようにしておくこと」を宿題とし、クラスでは殆どの時間をペアワークに費やした。授業時間の最後には、相手を見て「臨機応変」の対応ができるように練習させた。コース途中で、家庭事情により1名が出席不能となり、奇数人数でのクラス運営となった。そのため、ロールプレイでは最も会話力の低い学生の相手を教師が務めた。会話力の高い学生同士のペアでは、会話内容に創意工夫が見られた。課題の提出方法はメール添付とし、メール本文も添削指導の対象とした。これにより、コース終了までにクラスの全学習者がメールに使用する待遇表現を習得することができた。

2限には「読解」を設定し、各回ごとに完結させた。第3週までに火曜日の2限の授業を本間「読解」と白石「時事・ニュース」の分業制へ移行した。また、第4週までに木曜日の2限の授業を本間「読解」と白石「文法」の分業制へ段階的に移行した。

3限を「発表・議論」とした。即ち、2限で扱った内容に基づき3限で議論をする流れである。その際、1限で学習した表現を意識的に使用させた。第3週までに火曜日の3限を本間「発表・議論」と白石「時事・新聞」の分業体制へ移行した。また、第4週までに木曜日の3限の授業を本間「発表・議論」と白石「文法演習」の分業制へ段階的に移行した。

外部講師による課外活動や夏草クラスとの合同授業などイベント性のある活動の内容を予め調査し、授業でそれらの活動で想定される話題や使用語句に慣れさせた。例えば、能楽師・河村晴久氏の講演の前には「読解」で伝統工芸を扱い「発表・議論」で伝統という概念を議論している。また、横浜市米州事務所の講演の前には横浜市に関係した時事問題を取り上げている。即ち、各授業は毎回完結するが、それぞれが関連しており、学習者に習得した知識や技術を活用させることを意図した。また、全ての課題については、それを課した講師に提出させるとともに、予定表を充実させることにより申し送り事項を最小限にとどめ、講師間の連絡の簡素化を図った。例えば、予定通りに授業を実施できた日の授業記録は「予定通り」とのみ記入することとした。

中間試験までの前期は、本間が議論点を抽出、関連事項を含めプレゼンテーションを行い議論に移ったが、後半は各回学習者がディスカッション・リーダーとして授業をすすめた。この時間に於いても、パワーポイントの使用法を指導すると共に、引用・出典の明示を求めた。また、課外学習で外部講師が用意したスライドを予め分析批判し、1枚当たりに費やせる時間を計算、講義のペースを予測させた。これにより学生は自分の持ち時間からデリバリー・ペースを計算し、口頭発表会に備えることができたものとする。口頭発表の SCRIPT、パワーポイントスライドは、共に時間の都合上完成まで指導できた訳ではない。その点を考慮すると、概して完成度は高かったが、担当講師の私的時間を投入しているのが実情である。本年度はクラブの時間が設定され、その分日本語の指導時間が3時間削減された。加えて、個人授業の時間は日本語の技能指導を主とする方針が出されていたにもかかわらず、待遇表現は全ユニットを扱った点が無理の生じた原因と考える。

(文責：本間光徳)

### 3-1-2 夏草クラス

#### 【人員構成】

担任：川西由美子、副担任：河野多佳子

受講者6名：博士課程3名、修士課程3名（東アジア研究2名、日本文学1名、比較文学1名、日本近現代史1名、日本現代史1名）

#### 【コース目標】

##### A. 総合面

- ・具体的、及び、抽象的な観点で情報を把握し、表現することができる。
- ・話題や論点などに一貫性を持たせることができる。

## B. 読む

- ・多様なテーマ・ジャンルの文章が読める。精読・速読ができる。
- ・裏付けのある意見、仮説、文化に関わる表現や文化的な前提を理解することができる。
- ・構成を意識し、次の展開を予測しながら読むことができる。

## C. 聞く

- ・ニュースや講義などが聞き取れ、理解することができる。
- ・日常的なやり取りやディスカッションで相手のニーズ・要点などを聞き取ることができる。
- ・発音・イントネーションなどを聞き取り、活かすことができる。

## D. 話す

- ・時と場合に合わせて機能的に適切な表現、相互作用・談話管理（発言権の適切な取得や裏付け部分と主要論点の区別をつけるなど）のストラテジーを使うことができる。
- ・自分の経験を簡潔に雑談形式で始めて、一定の長さ続けて終わることができる。
- ・相手の意見をまとめつつ、自分の意見を簡潔に述べるができる。
- ・適切に問題提起ができる。叙述・描写をすることができる。

## E. 書く

- ・詳細に正しく幅広い話題について書くことができる。
- ・構成と議論の掘り下げ(因果関係、比較、時系列など)により論点の関係が一貫した文を明瞭に書くことができる。
- ・適切な文章形式にしたがってフォーマルな通信文を書くことができる。

表2 夏草クラス時間割

時間	月	火	水	木	金
8:30- 9:20	出来レポ /速読描写 待遇表現	スピーチ ニュース報告 待遇表現	出来レポ スピーチ 待遇表現	スピーチ /速読描写 待遇表現	ニュース報告 待遇表現 まとめ
9:30- 10:20	読解	読解	読解	表現クイズ 読解	読解 まとめのディ スカッション
10:30- 11:20	文法 発話発音練習	ディスカッ ション	表現まとめ 発話発音練習	ディスカッ ション	クラブ活動 (7/2,7/9,7/16)

## 【主な教材】

近藤安月子他著『上級日本語教科書 文化へのまなざし』東京大学 AIKOM 日本語プログラム、東京外国語大学留学生日本語教育センター編著『留学生のためのアカデミック・ジ

ャパニーズ 動画で学ぶ大学の講義』スリーエーネットワークなど

【コメント】

今年を受講生6名がそれぞれ自分は「内向的なほうだ」と口にするほど大人しく、議論を深めるということは困難であったが、授業の回を追うごとに述べる意見文も複雑になり学習した表現を使う積極性は見られた。個人授業はこのような学生にはありがたい時間であったようだ。また、授業中は大人しく発言も活発とは言えなかったが受講者同士はすぐに連絡先を交換していたようだった。パンデミックの影響により遠隔授業も1年以上経験しているためか授業のみカメラオンで休み時間はほぼ誰もいない状態で雑談がしにくかった。

授業数としては今年海の日・スポーツの日・山の日の休日もあり、また金曜の3限目は3回クラブ活動になったので例年より授業数が減り授業計画の時間配分に工夫が必要で、詰め込みすぎないようにした。クラブ活動は他のクラスの学生とも交流できると好評であった。

今年も昨年度同様、夏海クラスとの合同授業を2時間行うことができた。クラス分けの後すでに夏海と夏草の会話力の差が懸念されていたが、担任の先生の協力により開催となった。去年と同じ内容・教材を採用したのでやりやすく、今年の実力に合わせて調整をした。興味、ニーズ、タイミングが合えば今後も推奨したい。夏草の受講者に合同授業で学んだことを書かせたところ、有意義であった、緊張したが夏海の受講者の流暢な日本語を聞いて刺激になったとのことだった。議論の前に自由会話の時間がほしいという声もあった。Remoもあるが、遠隔の環境なので特にお膳立てが必要なようだ。

1限目はクラスメートと親しくなれるように「出来レポ」という毎日の出来事を雑談形式で1分以内に話す活動を取り入れた。「54字の物語」をその場で読んで説明させる「速読描写」、ニュース報告なども行い、センター作成の『待遇表現』の時間は毎日30分確保した。「出来レポ」「速読描写」は担任担当。ニュース報告は副担任担当で週二回にして、指導を一貫させた。『待遇表現』は、補足説明（イントネーションなどの言い方の注意事項提示）をしながら使った。日本国内にいないということで動機付けが難しいが今回は受講者全員が訪日の経験があるのでその経験から必要性を感じていたようだった。今年は場面編を初めて活用した。

2限目は、読解の時間に充て、読み物のテーマは受講生の生活に関連したものや学術的に研究されたもの（翻訳、心理学、ウチとソトなど）を選んだ。今年は聴解を伸ばしたいという声が多いのに応え、受講者に選択させる読み物（文藝春秋オピニオン『2020年の論点100』など）の時間に、教材として動画（「NHKドキュメンタリー72時間」と「チョコちゃんに叱られる」）も組み込んだ。また、上記教材中の講義動画『日本は「国土が狭くて人口が多い」という神話』を使い、理解、議論する時間も設けた。講義と会話の話し方や文章の長さなどの違いに注意させ、期末発表と待遇表現に活かせるように指導した。今回

動画視聴を組み込んだことは好評で、個人授業にクラス授業で視聴した講義やテレビ番組のシリーズを選んで学習した受講者が複数いた。

3限目は文法、発話・発音練習、ディスカッションに充てた。文法の時間は受講者のニーズに合わせてセンターの「文法ノート」と『レベルアップ日本語文法』を使いながら行った。今回は Google フォームを使い繰り返し復習を可能にし、中間・期末対策にも活用できるようにした。実際に受講者も複数回活用していた。

中間試験後にそれまでに努力したことと後半に努力したい目標を書かせた。期末試験後にも同じように書いて自己分析をさせた。これは受講者それぞれの自覚を促すと同時に講師の提案を聞かない傾向にある学生への対策でもあった。

期末発表は中間試験後にトピックと一段落の要旨を提出させ、それから毎週、初稿、書き直し、最終稿と進め、クラス内リハーサルもスライドを見せながら行う全体リハーサルと部分ごとにも行なった。発表の発話発音練習は個人授業の最終回を活用した。

(文責：川西由美子)

### 3-1-3 夏鳥クラス

#### 【人員構成】

担任：結城佐織、副担任：高橋佳奈子

受講者4名：博士課程1名、修士課程2名、学部卒1名、（哲学1名、アジア研究1名、日本研究1名、政治学・スペイン語1名）

#### 【コース目標】

##### A. 読む

- ・読み物に書いてあることや筆者の意図を正しく理解することができる。
- ・論理的な文章の構成を知り、学術論文を読むための基礎となる表現や文型を理解することができる。

##### B. 聞く

- ・ニュースや発表などを聞き取り、理解することができる。
- ・読解本文の内容を聞き取ることができる。
- ・日常的なやり取りやディスカッションで、相手のニーズや要点などを聞き取ることができる。

##### C. 話す

- ・人間関係や場面・内容に合った話し方をすることができる。
- ・自分の経験を簡潔にわかりやすく話すことができる。
- ・聴き取ったこと、読み取ったことをまとめたうえで、意見を述べるすることができる。

##### D. 書く

- ・日常の描写から専門的な説明まで、適切な語彙や表現を使い、分かりやすくまとめるこ

とができる。

- ・内容や用途にふさわしい文体で、適切な文法や文型を使うことができる。

表3 夏鳥クラス時間割

時間	月	火	水	木	金
8:30-9:20	漢字学習 文法	漢字学習 文法	漢字学習 文法	漢字学習 文法	漢字学習 文法、読解の復習
9:30-10:20	読解	読解	読解	読解	待遇表現の復習 ニュース報告
10:30-11:20	待遇表現 会話	待遇表現 会話	待遇表現 会話	待遇表現 会話	課外学習について クラブ活動 (3回)

#### 【主な教材】

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 (2015)『改訂版 留学生の日本語 読解編』アルク、友松悦子・和栗雅子著 (2004)『初級日本語文法総まとめポイント 20』スリーエーネットワーク

#### 【コメント】

漢字学習では「WebKIC」を使用した(参考、秋澤 2015)。コース前半に第1回から第15回を行い、コース後半も第1回から第15回を繰り返した。読解や文法でも WebKIC で学習済みの漢字が出てくる場面が多く、全体の学習効果があがったと考える。

文法は初級を扱ったため、学生は学習項目としては学習済みであり、文法の理屈は理解していた。しかしながら「使う」という面では誤りが多かった。選択肢の問題などは正解できるが、絵や動画で行為者、被行為者の立場を説明する活動などでは正解率が下がった。復習では実践的な場面設定を行い、使えるようにするための練習を繰り返し行った。細かい点での誤りは依然として多く、今後も自主学習が望まれる。

読解では語彙力の問題、文章の構成が把握できないという問題があった。1週目の授業では予習の段階でわからなかった部分について質問を受け付けるという形式で行っていたが、2週目からは教員からの質問と解説を中心とした。目で見ればわかるが聞いてわからないという語彙力の不足を補うために、読解の復習は聴解形式を中心に行った。授業終了時には理解できたというコメントがあったのは幸いである。

待遇表現は「基本会話1」の表現を覚えることと「フロー」(会話の流れ)を重視した。決まり文句や慣用表現などを正確に覚えるのには苦労していたようだが、フローの理解は良かった。留学や仕事、旅行などで来日経験のある学生が3名おり、類似表現との違いに関する質問も出た。

会話では読解に関するテーマや、社会問題にかかわるテーマについて話し合った。コー



ス開始直後はなかなか話し合いとまではいかず、個々の意見を個別に述べるにとどまっていたが、コース後半では相手の意見を引用して自身の意見を述べるなどの成長が見られた。ニュース報告では表現集と発表の構成を提示した。学生は選んだニュースについて報告し、ディスカッションポイントを挙げ、司会として授業を担当した。コロナウイルス、オリンピック、世界文化遺産、たばこの販売禁止、難民支援というテーマが選ばれ、幅広い分野での話し合いができた。

課題として、漢字学習、文法、読解で扱った語彙・表現の例文作成、文法のクイズ(Google フォーム)、読解に関する小作文、待遇表現の会話文やメールの作成を毎日出した。週末は週末作文、発表に関する原稿やスライドなどの作成、課外学習の予習を出した。

非常にまじめで、日本語の習得に対して熱意をもつ学生ばかりであった。日々の課題もほぼ遅れることなく提出していた。全員が一度も欠席することなく、お互いを尊重する雰囲気があり、冷静で建設的な話し合いができていた。オンラインという環境下でもクラスに問題が生じなかったのは、ひとえに学生のおかげである。

(文責：結城佐織)

### 3-1-4 夏柳クラス

#### 【人員構成】

担任：加藤陽子、副担任：石川晶子

受講者 6 名：博士課程 2 名、修士課程 3 名、学部卒 1 名（美術史 1 名、東アジア研究 3 名、歴史学 1 名、ドイツ学 1 名）

#### 【コース目標】

##### A. 読む

- ・読み物の内容が正しく理解できる
- ・読む技術を意識化しながら読める

##### B. 聞く

- ・ナレーション・会話の両方の要点が理解できる
- ・一定の長さを持った時事ニュースを聞き、概要が理解できる

##### C. 話す

- ・相手と場面に合わせ、適切な流れのある会話ができる
- ・討論の際、十分な事実の説明ができ根拠が明確な意見が述べられる
- ・自然な発音・アクセントに注意しながら話せる

##### D. 書く

- ・構成が明確なまとまりのある文章を書くことができる
- ・自分で自分の誤りを修正できる力が身につけられる

表4 夏柳クラス時間割 (2・3限の上段は1-4週目 下段は5-6週目)

	月	火	水	木	金
8:30- 9:20	スピーチ・ ニュース報告・ 待遇表現	スピーチ・ 待遇表現	スピーチ・ 待遇表現	スピーチ・ ニュース報告・ 待遇表現	スピーチ・ 待遇表現復習
9:30- 10:20	テーマ (異文化コミュニケーション、情報化社会、人間の生き方) に沿った読解・討論				討論・語彙小テスト
	アカデミックスキル		学生が選んだ読み物の読解・レジюме説明・討論		
10:30-	文法				クラブ活動/文法
11:20	読解技術	文法	読解技術	文法	

## 【主な教材】

日本研究センター (2020) 『待遇表現』、許明子・宮崎恵子 (2013) 『レベルアップ日本語文法 中級』 (くろしお出版)

## 【コメント】

各技能の目標は前掲の通りであるが、総合的な目標としては、大学院のゼミで行われる様々な言語活動が円滑に、かつフォーマルに行えることを目標とした。この言語活動とは具体的には、資料の読解、内容の要点をまとめたレジюмеの作成、レジюмеをもとにした読み物の内容の口頭説明、内容についての質疑応答、提示した論点に沿った討論、討論内容の報告である。それを可能にするために、主に2限に読み物の内容確認と討論を行った。また、討論の際に使われるフォーマルな表現を紹介し、それを使いつつ議論を深めていくよう促した。5-6週目に実施した「学生が選んだ読み物読解・レジюме説明・討論」のところでこれを実践した。学生は、レジюмеをもとに読み物(1000~1500字程度の資料)の内容を口頭で再現することに最初は慣れていない様子だった。しかし最後の方に担当した学生は、上手な学生のやり方を学び、ただレジюмеを読み上げるのではなく、自分の言葉で資料の内容を再構成し、討論の論点の説明なども付け加えることができていた。時間的な制約があり、司会者としての立場で討論を導く練習はできず残念ではあったが、参加者としてはある程度のフォーマリティーを維持して討論に参加することができるようになった。

1限の待遇表現は、自己紹介・スモールトーク・依頼と断り・誘いと断り・ほめられた時の対応・許可求めを取り上げた。会話の流れと表現に注目したペアでの練習が中心であった。学生ごとに不得意なフォーマリティーのレベルが違い、どの機能も各レベルの練習が必要であった。特に会話の始め方、切り上げ方が不自然で練習が必要な場合が多かった。

3限の文法は、文法項目別に1日1課の割合で進んだ。復習中心ではあったが、改めて明確になったこともあるようだった。クラスでは間違いやすい部分の指摘に加え、その日

に扱った文法項目の中上級的な用法を紹介したり練習させたりし、文法力の向上を狙った。また、文法項目が読解の時にどのように生かせるかという点にも注目し、練習を行った。

学生は皆、まじめに予習や課題に取り組み、指摘された間違いや不得意な部分を認識し克服しようとしていた。温和だが静かすぎることもなく、他の学生と協力して教室活動を行っていた。反省点としては、漢字そのものに焦点を当てた学習と、文型を使った短文作成ができなかったことである。また、学生からは、待遇表現、文法復習、話すことにもっと時間を使ってほしかったという要望もあった。これらを課題とし、今後の授業に生かしていきたい。

(文責：加藤陽子)

### 3-1-5 夏山クラス

#### 【人員構成】

担任：後藤恵利 副担任：城佳子

受講者5名：博士課程4名（都市計画、民族音楽、政治科学、アメリカ移民史 各1名）

修士課程1名（日本史）

#### 【コース目標】

##### A. 読む

- ・新しい語彙や文型表現を学ぶ。
- ・短い新聞記事や小説、評論文を読めるようになる。

##### B. 聞く

- ・自然な速さの日本語を聞き取る力をつける。

##### C. 話す

- ・自分の意見を分かりやすく相手に伝えられるようになる。
- ・場面や相手に応じて、適切な表現が使えるようになる。

##### D. 書く

- ・話し言葉と書き言葉の使い分けができるようになる。
- ・読んで理解したことや自分の意見を簡潔に書けるようになる。

表5 夏山クラス時間割

	月	火	水	木	金
8:30-9:20	読解	読解	待遇表現	待遇表現	読解
9:30-10:20	読解 話し合い	読解 話し合い	読解 話し合い	読解 話し合い	読解 話し合い
10:30-11:20	文法	文法	ミニ報告	ミニ報告	文法／クラブ活動

## 【主な教材】

清水正幸・奥山貴之 (2015)『日本語学習者のための読解厳選テーマ 10 中上級』凡人社、  
友松悦子・和栗雅子 (2004)『短期集中初級日本語文法総まとめポイント 20』スリーエー  
ネットワーク、  
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2020)『待遇表現』

## 【コメント】

・当クラスでは担任が担当する月・火・金曜日を基礎固め（文法復習）、副担任が担当する水・木曜日を応用重視（ミニ発表、待遇表現、短作文）と位置付けた。読解以外は担当教師間で業務分担をしたので、学生も曜日によって何をやるべきか把握しやすかったのではないかと考える。

・当クラスではクラスノート（Google ドキュメント）を活用し、クラス全体での情報共有に努めた。担当教師間でクラスノート用の目印（アイコン）を決めておき、クラスノートに統一感が出るように工夫しながらノート作りを行った。クラスノートは授業中画面共有し、学生が学習内容（キーワード、解説、注意点、参考資料等）を常時確認できるようにした。なお、学生にもドキュメント編集権限を与え、宿題の短作文や話し合いの論点などを事前に書き込ませた。

・復習用に語彙クイズと文法復習クイズ（Google フォーム）を実施した。クイズは授業前に Google クラウドにアップロードしておき、任意受験とした。毎回欠かさず受験し、積極的に質問しに来る学生もいれば、声掛けをしてもなかなかクイズ受験が進まない学生もいた。全面オンライン授業のため例年と比べ全体の授業時間数が減らされている。この状況で授業内にクイズを一斉に実施することは効率的ではない。オンラインでの任意受験という選択は致し方なかったと言える。

・当クラスは日本在住の1名を除く、4名がアメリカ在住であった。全面オンライン授業のため現時点の実生活で「待遇表現」を使う会話場面は少ない。そのため「待遇表現」の授業では教科書に準じてメール指導を中心に行った。

・授業では Zoom のブレイクアウトルーム機能を活用し、グループワークの時間を設けた。学生には各自事前準備したもの（読み物内容まとめ、練習問題の解答）を基にワークに参加するよう促した。さらにメインセッションでグループ報告させることによって、クラス全体での情報共有を心がけた。

・非常に真面目で協力的な学生たちのおかげで、終始よい雰囲気の中授業を行うことができた。活発で有意義な教室活動が行えたことは大いに評価したい。しかし、話し方、書き方の面ではカジュアルとフォーマルの使い分けができていないことが多かった。今後は文法面での正確性を向上させること、学術発表などを意識してフォーマルな話し方と書き方を身につけることが各学生共通の課題である。

（文責：後藤恵利）

### 3-2 受講者によるクラス授業の評価

夏期コース終了時に受講者に対してアンケート調査を実施した。大項目は A. 全体的なこと、B. オンライン学習、C. 学習活動、D. 授業以外の活動、E. 教師、スタッフへのコメント、F. 奨学金情報、G. 夏期コース期間中の生活についてである。全受講者 27 名中 20 名から回答が得られた。本節では上記調査項目のうち、C. 学習活動への評価について述べる。

クラス授業の Overall assessment の回答数は、Excellent が 14 (70%)、Good が 4 (20%)、Fair が 2 (10%)であった。自由記述のコメントは全て肯定的なもので、大別すると講師の熱意や配慮への感謝、クラスのレベル設定や教材の選定がやや高めで結果的によかったとするものであった。

クラス分けについての回答は Excellent が 9 (45%)、Good が 10 (50%)、Fair が 1 (5%)であった。否定的なコメントは、クラスの他の受講生と比較して自分を高くあるいは低く評価するものであった。一方で、コースの難易度に関しては Just right が 16 (80%)、教材の難易度に関しても Just right が 18 (90%)と評価が高く、授業や教材の難易度の調整は成功していたと思われる。

また授業のペースを Too fast とする回答が 8 (40%)、Too slow とするものは 1 (5%)、宿題を Too much とする回答は 7 (35%)、Too little とするものは 1 (5%)であり（ともに残りの回答は Just right）、全体的にやや負担を感じていた様子がうかがえる。「日中アルバイトをしていると宿題がこなせない」とのコメントもあり、従来の対面授業であれば夏期コースでの日本語学習は日中の主要な活動であったものが、北米在住の受講生にとっては 1 日の終わりの数時間のものになっていたことも要因であると考えられる。

### 3-3 個人授業

オンラインや時差により受講者の集中力に限界があることを考慮し、昨年同様、教師 1 人に対して受講者 1 人で行う 40 分間の個人授業を、週に 1 回、クラス授業開始前か終了後の時間帯に実施し、受講者の専門・興味を踏まえ必要な技能を強化することをねらいとした。教師と受講者の組み合わせは全 6 回固定で、事前に行った希望時間調査の回答をもとに決定しクラス担任、副担任が担当クラスの受講者を 2 名から 4 名担当することになった。

受講者が自身のニーズを把握し、講師に提案する形で授業計画を立てた。表 6 は、授業記録から実施内容を技能別にまとめたものである。実際の授業においては、例えば論文を読む場合に、内容理解にとどまるのではなく、語彙や表現の使い方を確認したり、受講者自身の意見を述べて講師と議論したり、その中で音声面や文法面のフィードバックが与えられたりなどと、総合的な活動に広がるが多かった。

表6 個人授業の実施内容

技能	内容
話す	日常会話、専門・映画・ニュースなどの内容説明、期末発表準備、音声指導、待遇表現、ビジネス会話、意見交換
聞く	映画、ニュース、ドキュメンタリー番組、web上の講義
読む	小説、専門分野の論文、専門書、新聞記事、N1読解問題、速読、外交文書
書く	専門に関する作文、要約文
漢字	KIC (Kanji in Context)、読みと例文作成、
文法	授業内容の質問と解説

コース終了後のアンケート調査での個人授業に対する評価は、excellent が 70%、good が 30%であった。9件あった自由記述のコメントは肯定的なものが多く、自分が苦手意識を持つ活動や関心あることに集中して取り組めたこと、受講者自身が主導して進められたことなどが評価されたようである。

(文責：橋本佳子)

## 4 課外活動

### 4-1 クラブ活動

サマーコースでは例年プログラム期間中にクラス替えがなく、クラスの枠を超えた受講者同士の交流は、センター施設内でのイベントと休憩時間や放課後のほか、希望コースを選択して参加する校外学習などで行われている。オンラインでもこの機会を提供するため、また、受講者が日本語を使って自分の好きな活動をする時間を提供するため、今年度はクラブ活動を取り入れた。プログラム前半の金曜日(7/2、7/9、7/16)の3限に、授業の一環として全員参加で実施した。

クラブ活動の担当は金曜日出講の講師5名である。趣味や得意分野から活動内容を選び、計3回の活動計画を立て、2分間の紹介動画を作成した。受講者はこの動画を視聴し、クラブ活動希望調査に第二希望まで回答したが、全員第一希望のクラブに振り分けられた。各クラブの活動内容と受講者数は表7の通りである。3回すべて同じクラブに参加することを原則としたが、1回目の活動後に1名の移動を認めた。受講者数は移動後のものである。

表7 クラブ活動の実施内容

クラブ名	主な活動内容	受講者数
ヨガ・筋トレクラブ	動画に合わせて筋トレやヨガを行い、ペアでリラククス方法や健康に良い食事、運動などについて話す。	4
多摩クラブ	多摩地域の歴史や文化に関する動画を視聴し、ペアで話した後講師に質問し楽しく知識や教養を増やす。	6
テレビクラブ	日本の短編ドラマやバラエティショーを視聴し、内容を確認したり意見交換をしたりする。	6
ペン習字クラブ	書き方シートとペンを使い、姿勢やペンの持ち方に注意しながら美しい字が書けるように練習する。	6
音楽クラブ	好きな音楽や楽器についてペアで話したり皆の前で発表したりする。歌や楽器の演奏を披露する。	5

コース終了後のアンケート調査でのクラブ活動に対する評価は、excellentが55%、goodが45%であった。自由記述のコメントは全て肯定的で、「違うクラスの学生と会えてよかった」「週の終わりにペースダウンする時間が持てた」「もっと長い時間、毎週末やりたかった」などである。プログラム後半は金曜日3限をクラス授業とし、授業時間内でのクラブ活動はプログラム前半のみであった。受講者から希望があればプログラム後半にも自主運営クラブとしての継続を認めサポートするとしていたが、申し出る者はなかった。自主的に活動計画を立てる余裕がないこと、授業時間外に全員が集まる時間を確保しにくいことなどが要因だと推察される。

授業を離れた活動を楽しみ、ブレイクアウトでの会話を通して受講者同士の交流が深められる様子が見受けられ、クラブ活動をカリキュラムに取り入れたことには一定の効果があったと考えるが、授業時間をどれだけクラブ活動に充てるかは検討の余地があるだろう。

(文責：橋本佳子)

#### 4-2 課外学習

例年サマーコースでは、全員参加の校外学習として横浜のみならず東京や鎌倉にまで足を延ばし、日本の文化や歴史、産業や風俗などを体験的に学ぶ機会をほぼ毎週提供している。オンラインでも文化的な活動を取り入れてほしかったという昨年度のアンケートのコメントもあり、今年度は校外学習に代えて外部講師による全6回の講演会を企画し課外学習として実施した。講演は質疑応答を含めすべて日本語で行い、教室外で使用される生の日本語に触れる機会ともなった。

講師と受講者の居住地域の時差を考慮すると、平日はクラス授業と個人授業の時間帯以

外に全員が集合するのは難しく、また授業時間を減らせないことから、やむを得ず課外学習は日本時間の土曜日または祝日の午前中、9:00~10:30の開催とした。講演会の準備や当日の司会進行は、所長、主任、副主任、スタンフォードオフィスのマネージングディレクターが交代で行い、担任と副担任は休日とした。

受講者の参加は任意であるが、各講演の1週間前に講演内容を連絡掲示板で告知し、直前にもメールを送り参加を呼び掛けた。予告動画として講演内容をまとめて短い動画を作成した回もあった。また、講演者から事前に講演資料を入手し、キーワードや難解な語彙を集めて作成した単語リストと共に受講者に公開し、目を通しておくように指示した。内容についての確認や議論などをして講演に備えたクラスもあった。毎回の講演内容と参加受講者数は表8の通りである。

表8 課外学習の実施内容

講演日	講演内容	参加受講者数 <sup>4</sup>
7/3 土	センター卒業生(2004-5)でジャーナリストのジェイ・アラバスター氏によるトークセッション。アラバスター氏出演の捕鯨問題に関するドキュメンタリー映画を事前に公開し、当日は捕鯨に関する解説の後、受講者からの質問に答える形で進行。	20
7/10 土	能楽師の河村晴久氏による講演。歴史から所作に至るまで、能とは何かについての解説と実演。	19
7/17 土	日米協会理事久野明子氏によるワークショップ。日本初の女子留学生の生き方についての講演と、ブレイクアウトによるグループでの話し合い。	19
7/22 祝	横浜三溪園からの講演会。歴史学者で園長の加藤祐三氏による「都市横浜と三溪園」、副園長村田和義氏による「三溪園の成り立ち」、事業課長吉川利一氏による「三溪園の美」。	17
7/31 土	横浜市米州事務所矢澤寿和氏、ニコライ・ミューズ氏による、横浜市の歴史、国際化戦略、都市計画、企業誘致などに関する講演。	15
8/7 土	センター卒業生(2019-20)で立教大学非常勤講師のエミリー・バットナー氏によるワークショップ。谷川俊太郎の詩を鑑賞する体験から言葉と芸術の関係を考察。	14

コース終了後のアンケート調査での課外学習に対する評価は、excellent が 30%、good が 40%、fair が 15%、did not participate が 15%であった。自由記述によるコメントは6件であり、「バラエティに富んだトピックで興味深く楽しめた」という肯定的なもの、



「講演者の話が長く、日本語が難しく理解できなかった」という否定的なものに分けられる。単語リストを見ても理解できなかったり、専門外の内容や予備知識のない話題では集中できなかったりしたことが、回が進むにつれて参加者が減少する要因となったと考えられる。1度も参加しなかった者が数名おり、アメリカ在住の受講者にとっては金曜日の夜の時間で家族や友人との予定を優先しなければならないなどの事情があったようである。また、内容に興味や関心がない回には欠席したという受講者もいた。

講演会終了後には参加者にコメントやお礼などを書いてもらい、講演者にまとめて送付した。提出率を上げるため途中から英語でのコメントも可としたが、講演に対する感想だけでなく意見や質問などもあり、また毎回日本語で丁寧なお礼の手紙を書く学生もおり、講演者に好評であった。

外部講師による講演会はサマーコースでは初の試みであり、企画、実施する上で、全員参加か自由参加か、時間を確保できるか、どのようなテーマを選ぶか、講義形式かワークショップ形式か、受講者の理解度の差をどうするか、などの課題も明らかになった。しかし、毎週幅広い分野からの専門家の講演を聞き直接対話する体験は受講者にとって非常に貴重で有意義なものであり、今後もプログラムに取り入れるべく検討していきたい。

(文責：橋本佳子)

### 4-3 会話セッション

2020年度の夏期コースではセッションを希望する受講者がインターネット上のシステムで予約する形式であったが、毎回の予約が面倒であったり時間を間違えて参加できなかったりなどの理由から参加率が低かった。そこで今年度はセッションを希望する受講者と会話パートナーをペアとして固定する形式に変更した。最初のセッションの日時だけを担当者が決め、2回目以降はペアで予定を確認しながら継続して行うこととした。

プログラムの始めにアンケートを実施したところ、会話セッションを希望しない受講者は3名（うち1名はすでに会話パートナーがいると回答）だけで、24名<sup>5</sup>が参加を希望した。会話セッションができる時間帯、会話セッションで話したいこと、についても回答してもらい、会話パートナーとのペアリングの参考にした。ボランティアの会話パートナーは昨年度からの継続参加が4名、新規参加が8名の計12名<sup>6</sup>で、米国在住が2名、日本在住が10名であり、社会人6名、大学生6名である。会話パートナー1人当たり受講者1名から4名を振り分けた。

ペアと初回のセッションの日時を決めて受講者と会話パートナー双方に連絡し、ZOOMリンクの設定と2回目以降の予定は会話パートナーに任せた。週に1回30分、全部で6回の実施を目安とし、学生がセッションに現れない、会話が成立しないなどの問題があれば担当者に連絡することとした。会話パートナーからは、ペアの受講者がセッションに現れないという連絡が最初の週に3件、最後の週に1件あったがその他に問題はなく、半数

以上のペアが6回以上のセッションを実施し、中にはプログラム終了後も継続して計9回実施したペアもあった。

コース終了後のアンケート調査での会話セッションに対する評価は、excellentが70%、goodが10%、fairが5%、poorが5%、did not participateが10%であった。自由記述のコメントは10件あり、個人名を挙げての賛辞、同世代のパートナーと気軽に話せたことや日本人の友人ができたことに対する喜びなどが述べられている。一方で、会話パートナーの話が理解できずセッションが役に立たなかった、会話パートナーが最後の2回のセッションに現れなかったというコメントがあった。受講者がこのような問題を訴え出ることがなく、担当者が把握できていなかったことは反省すべきである。

ペア固定制の導入により会話セッションの実施率、学生の満足度が大幅に上昇したことは明らかであり、今後もこの形式が望ましいと考えられるが、問題発生時に早期に把握し対処するための策を講じる必要がある。

(文責：橋本佳子)

## 5 受講者による夏期コースへの評価

本章ではコース終了時のアンケート結果のうち A. 全体的な評価、B. オンライン学習について述べる。

### 5-1 全体的な評価

夏期コースへの全体的な評価は Excellent が 13 (65%)、Good が 7 (35%) であり、概ね満足しているようである。肯定的なコメントとしては「少人数クラスのため上達できたし積極的に参加できた」「参加できて光栄」「言語技能の要素がよく組み合わさっていて多角的なアプローチだった」などがあつた。一方、否定的なコメントとしては「リンク、フォルダが多すぎて混乱した」「オンラインでも教育の質が高かったがもう少し復習の要素が欲しかった」などがあつた。IUC の夏期コースを他の学生に薦めるとの回答は 19 (95%) あつたが、その中には「オンラインであれば薦めない」とのコメントもあり、オンラインでのコース実施を最後まで残念がる様子が伺える。

### 5-2 オンライン学習について

オンライン学習についての質問項目と回答は表 9 のとおりである。3-2 における「クラス授業への評価」、5-1 の「全体的な評価」、さらに本項目の「対面授業との比較」においても授業形態としてのオンライン学習は評価が低い。しかしこの 3 項目を通して見ると受講生もこれまでの経験からオンライン授業の問題点は予想していたことであり、半数が「予想より良かった」と答えていることは、一定の評価を得ているといえよう。

表9 オンライン学習についての質問項目と回答数

経験全体	対面授業との比較	予想との比較
Excellent 10 (50%)	Far superior 0 (0%)	Better than expected 10 (50%)
Good 8 (40%)	Slightly superior 0 (0%)	Roughly expected 10 (50%)
Fair 2 (10%)	Roughly comparable, with some demerits 8 (40%)	Worse than expected 0 (0%)
Poor 0 (0%)	Fair 2 (10%)	
	Somewhat inferior 8 (40%)	
	Far inferior 2 (10%)	

具体的に何がオンライン授業を困難にするかについては表10のとおりである。ほとんどの回答者が複数回答しており、1年以上のオンライン学習を経てもなお克服できない問題が多くあることがわかる。技術的な問題は、授業担当者からも報告があり、接続が不安定なため発表会の前に別途録画をしておくなどの対策が必要となった受講生が数名いた。

表10 オンライン授業で困ったこと

(複数回答可。分類は筆者による。数字は回答数。\*印は自由記述、それ以外は選択肢)

技術的なこと	心理的なこと	学習環境
接続が不安定 (9)	集中が難しい (12)	全てをコンピューター上で行うこと(4)
ヘッドセットの煩わしさ (4)	いつ話していいか判断が難しい (9)	資料へのアクセスが難しい(4)
音声のタイミングのずれ(4)	カメラの前で緊張する (4)	辞書や翻訳ソフトへのアクセスがしやすく一長一短 (1)*
音質の悪さ(4)	クラスメートや教師をより深く知ることができない (1)*	家庭では学習が妨げられることがよくある(1)*
アイコンタクトができない(4)		
画質の悪さ(4)	表情が読めない(1)*	

オンライン授業のための各種アプリケーションの使用については、担当講師が作った「クラスノート」（対面型授業における板書の役割）が「書かれた内容をあとで復習できる」、「わかりやすくまとめてくれる」などと特に好評であった。

本年3クラスで導入した Google Classroom については Excellent が 6 (43%)、Good が 6 (43%)、Fair が 2 (14%) で、「初めて使ったがわかりやすかった」「直感的に使える」

と肯定的なコメントが多かった。Google Drive の使用については Excellent が 6 (30%)、Good が 11 (55%)、Fair が 3 (15%) で、「必要なものをダウンロードするのに便利だった」とのコメントがあった。一方で、どちらも慣れるまでに困難を感じた受講者は存在し「わかりにくかった」「最初にオリエンテーションが必要だった」との意見があった。

### 5-3 その他

アンケート結果の中から授業以外の受講者の活動について明らかになったことを 2 点挙げる。2 章で述べたように、受講者間の交流促進を意図して Remo を設置したりクラブ活動の時間を作るなどしたが、授業外の時間に他の学生と話す機会があったとの回答は 9 (45%) にとどまった。また、夏期コース期間中ストレスや気分の落ち込みを感じたとの回答は 13 (65%) があった。授業に積極的に参加していてもクラス内の交流が授業後までは持続せず学習者が孤立しがちである遠隔学習特有の問題があらためて明らかになった。

## 6 おわりに

今年の夏期コースは、オンライン授業に不自由さを感じながらも、授業やコース設計に対しては受講生から高い評価を得られた。これは、受講生側も講師側も遠隔授業の経験があり、戸惑いや混乱が少なかったこと、受講者に柔軟に対応した授業が展開されたこと、さらには困難な状況でも日本語を学ぼうとする受講生の強い意志によるものと考えられる。

パンデミックによる遠隔授業での夏期コースの運営では、指示の明示化などわかりやすさへの工夫や、受講生が置かれている状況への配慮も今まで以上に必要となったが、それは教育活動の改善の良い機会となった。この遠隔授業の経験を、今後戻らば対面授業に生かし、一層の充実を図っていきたい。

### 注

- 1 コース開始時は 28 名であったが、家庭の事情により 2 名が途中で離脱した。
- 2 今年の受講者の居住地は日本 1 名、韓国 1 名、中国 2 名、タイ 1 名、ハワイ 1 名、米西部 9 名、米中部 2 名、米東部 10 名であった。
- 3 コース終了時のアンケート結果（回答者 20 名）によると、教材購入者 14 名のうち 7 日以内に届いた者 6 名、8-14 日で届いた者 7 名。理由は不明だが 1 名のみが 2 週間以上かかったと答えている。
- 4 この他に、漢文クラス、P コースの学生が数名参加した。
- 5 会話セッション参加を義務付けられた受講者 7 名を含む。
- 6 この他に教材助手 2 名が、参加を義務付けられた受講者 7 名を分担して担当した。

### 参考文献

秋澤委太郎 (2015) 「『Kanji in Context』を Web から使う ―長期的な使用に耐える多目的教育リソースの構築とその活用例―」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第4号 pp.38-58

<[https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2015\\_Akizawa\\_1.pdf](https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2015_Akizawa_1.pdf)>

佐藤有理・佐藤つかさ・小峰克之・秋澤委太郎・結城佐織・青木惣一・大橋真貴子・橋本佳子・千田昭予 (2020) 「遠隔教育による上級日本語教育実践報告 ―ICTを活用したオンライン授業移行への対応と課題―」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第9号 pp.1-21

<[http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020\\_SatoAri\\_et\\_al.pdf](http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_SatoAri_et_al.pdf)>

結城佐織・千田昭予・本間光徳・川西由美子・白石恵利奈・小峰克之・橋本佳子 (2020) 「2019-20年度 夏期コース報告」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第9号 pp.80-102

<[http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020\\_Yuki\\_et\\_al.pdf](http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_Yuki_et_al.pdf)>